

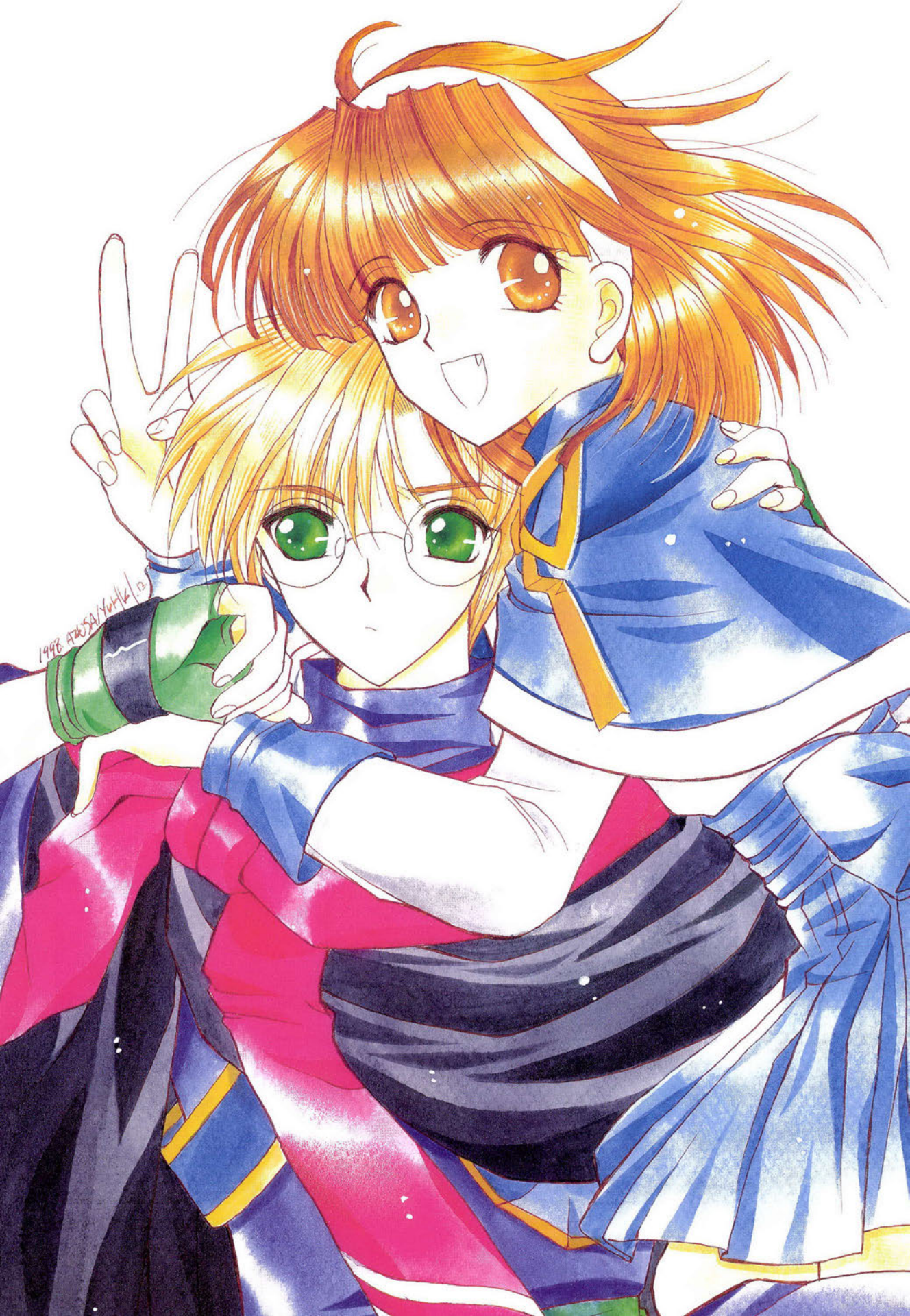


LOVEMANIA
SeacretService!
KOUFUKURON

2001 Azusa Yuhki/Fantastic Fortune book

FORTUNE COOKIE PLUS

and
plus contents!





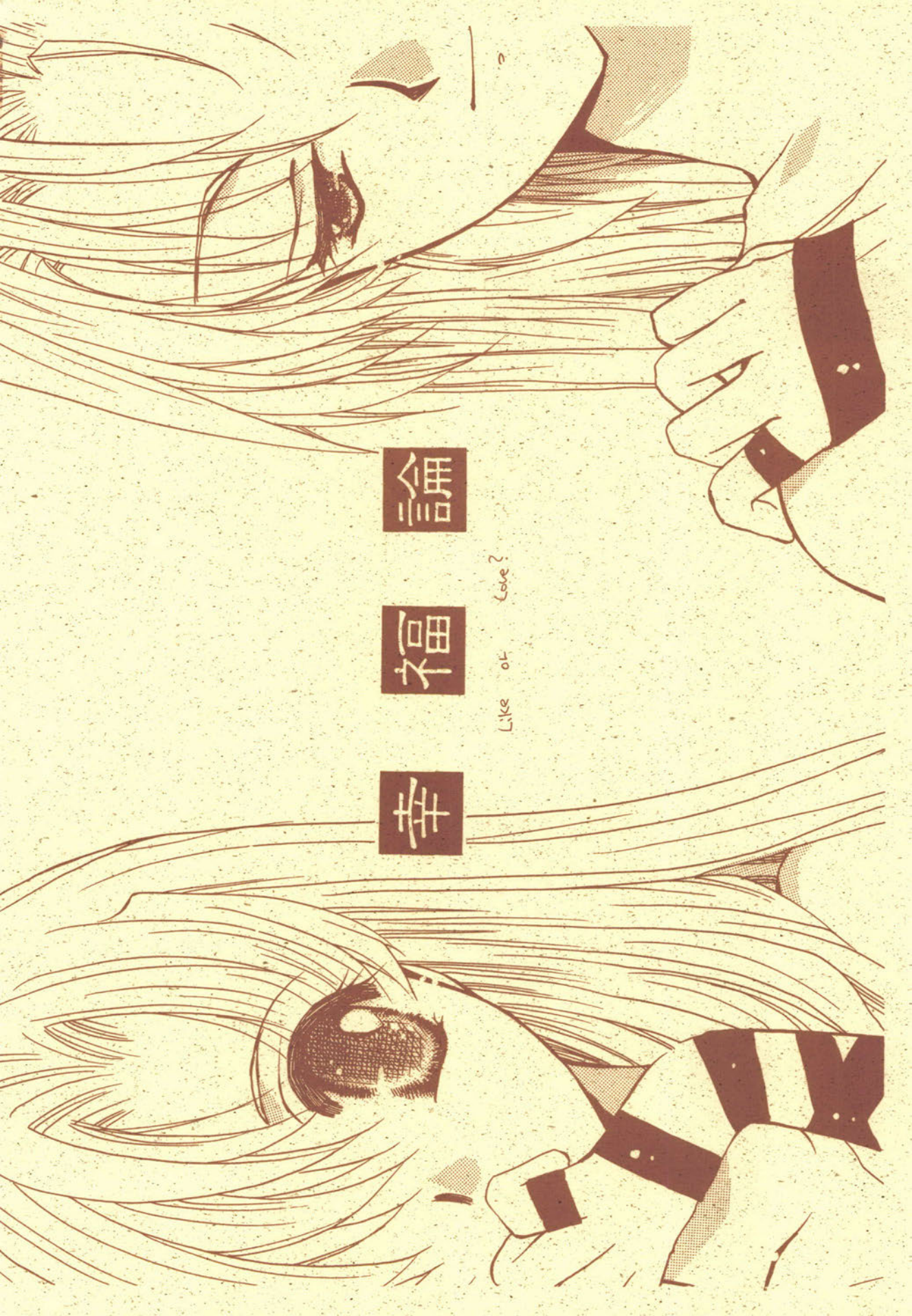
I'm **HAPPY** !!

再録集

Fortune Cookie

Foortune Cookie





調

福

幸

Like of Love?

SECRET SERVICE!!

ON
CHI!

FANTASTIC.

... URUSAI

JEWEL MASTER

UNSHO!
UNSHO!

RAKUTIN!

ASHIGA
GHAMAKAMO ...

2000

○
○
○

この本は JEWEL MASTER 発行のファンタスティックフォーチュン本を
再録・再編集した「Fortune Cookie」(2000.12 発行) に
新たに再録部分を足してまとめ直したものです。
すべての漫画及び文章は私が好きに書いているものなのでオ
フィシャルとして見とめられているものではありません。

○
○
○

初出：

口絵カラー1「LOVE MANIA」表紙 1998.12
口絵カラー2「Fortune Cookie」表紙 2000.12
色本文 2P 「幸福論」表紙 1999.12
色本文 3P 「シークレットサービス」表紙 2000.2

漫画部分も上記初出に準拠します。

SEACRET SERVICE



●シルフィス●



FILE 02 ▲

No. 9913652
1年C組 12番
剣道部
美化委員
特記: 全国中学生剣道大会準優勝
経験有

外国人
たぶんどっかの王子 「？」
よくしつこいスカウトにつか
まる 美形

●ディアーナ●



FILE 01 ▲

No. 9917584
1年C組 7番
合唱部
ベルマーク委員会 書記

天真爛漫な究極のお嬢様
趣味はアイドルのおっかけ
ミーハー

0

●●●●●●●●●●

HIGH

2000 JEWEL MASTER

SCHOOL

HONKI NI TORANAIDENE!!

OF

WAHAHA!

FANTA

●●●●●●●●●●

●ガゼル●



FILE 05 ▲

No. 9965427
1年B組 7番
剣道部
その他バレー部、バスケット部を兼部
特記: 全国中学生剣道大会三年
連続優勝

天と少年剣士 「たぶん」
はっきり言って番長
天下泰平 「サッパリ」

●アイシュ●



FILE 04 ▲

No. 9916747
2年A組 11番
家庭科部
美化委員 委員長
特記: 朝日文芸大賞入選
作家活動中

売れっ子学生作家
天然ボケ記念物
バシリ

●メイ●



FILE 03 ▲

No. 9916855
1年C組 35番
文芸部
生徒会 副会長
特記: 病気のため一年留年

病弱美少女というふれ込みの
はずがすべてを裏切って学生
生活復帰 変わらず台風

●セイリオス●



FILE 08 ▲

No. 9900115T

会長

特記: サークリッドグループ筆頭株主

超お金持ち
3高(古っ)以上
でもンスゴン (台無し)

●レオニス●



FILE 07 ▲

No. 9900128T

体育教諭

剣道部顧問

生活指導担当

特記: 剣道二段・そろばん一級

熱血体育教師 (嘘)
仕事大好き
前科者

●キール●



FILE 06 ▲

No. 9942557

2年A組12番

部活動なし

風紀委員 委員長

特記: 全国学生弁論大会優勝(個人)

風紀に命をかける男
ちまうとマッドデリスト
校則マニア

●イーリス●



FILE 10 ▲

No. 9900136T

音楽教諭(臨時)

合唱部顧問

特記: ショパンコンクール第3位

聖火芸術音楽院卒

音楽教師兼音楽プロデューサー
歌姫潜入捜査中
現在3枚目のアルバムがメガ
ヒット中

●シオン●



FILE 09 ▲

No. 9900135T

保険教諭

家庭科部顧問

特記: 精神医学免許有

ソムリエ資格有

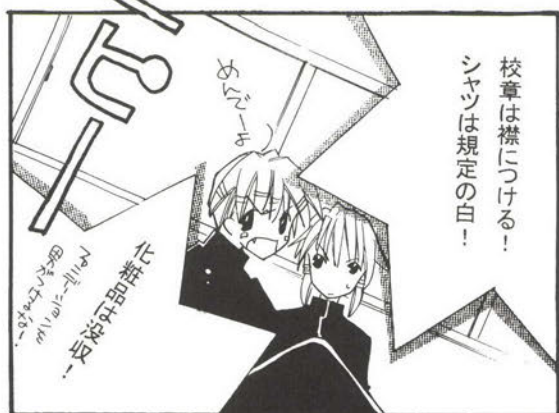
職業遊び人
社会適応者
でも本人は世の中大好き

※ オペラのキャラクターは
フィクションであり
? 実際のゲームには一切
関係がありません。

COMIC & DESIGN ...

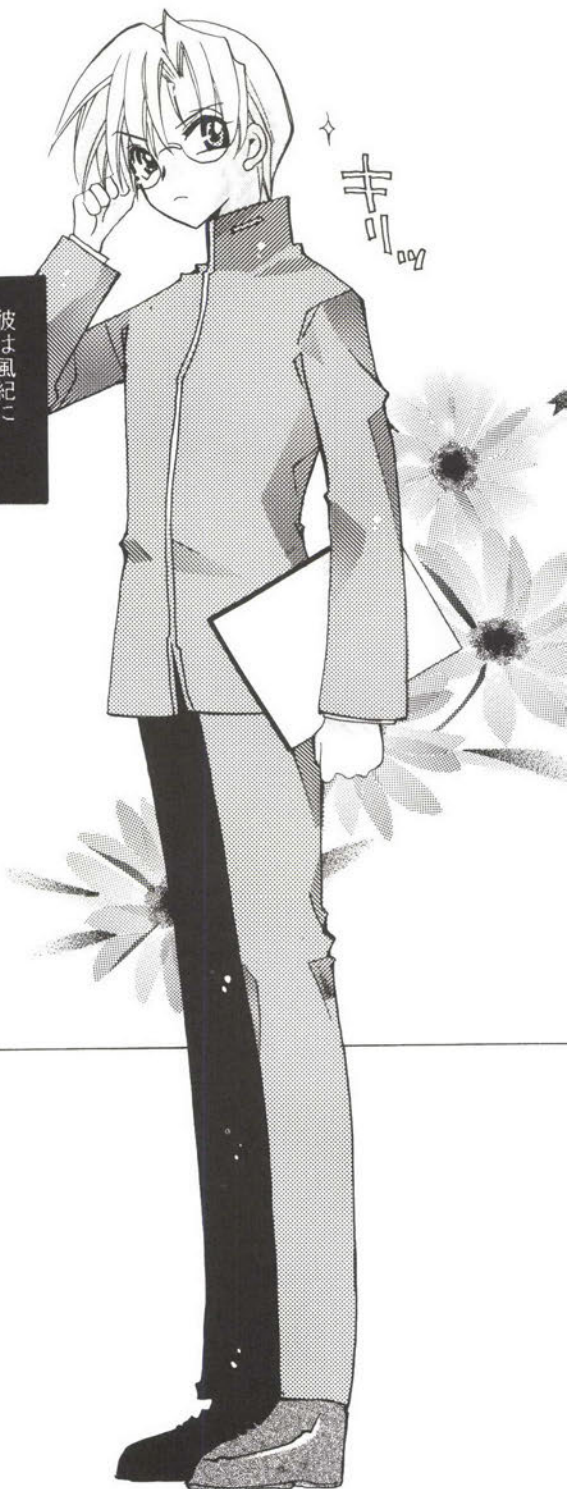
AZUSA YUUKI

only 2000



彼は風紀に
命をかける男

男女がまわす
容赦はしない



■兄弟ってなんだ■



好きな人の

秘密を知ったの



■Active Heart■

ゆうき あずさ

グハッ

いいんですよ
不可抗力です

それに……
いつまでも

隠しておける事でも
ないし



あのさー
差し出
がましいけど

理由
聞いちゃ
ダメ？

はー
だから
スカウトされても
断ってたわけね

ああ
それは

「二族の掟」
なんですよ



…それで
黙っていて
頂けますか

…ああ



暗 転。



ああ
そうか



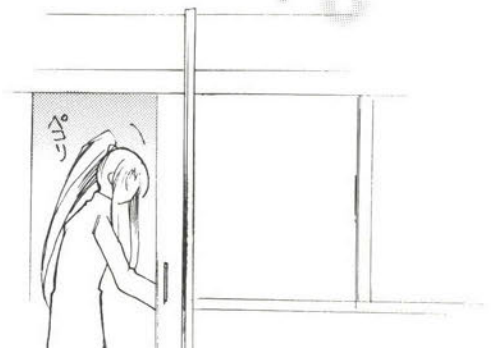
安心して！
悪いようには
しないから
もちろん
言いふらしたりは
しないよ

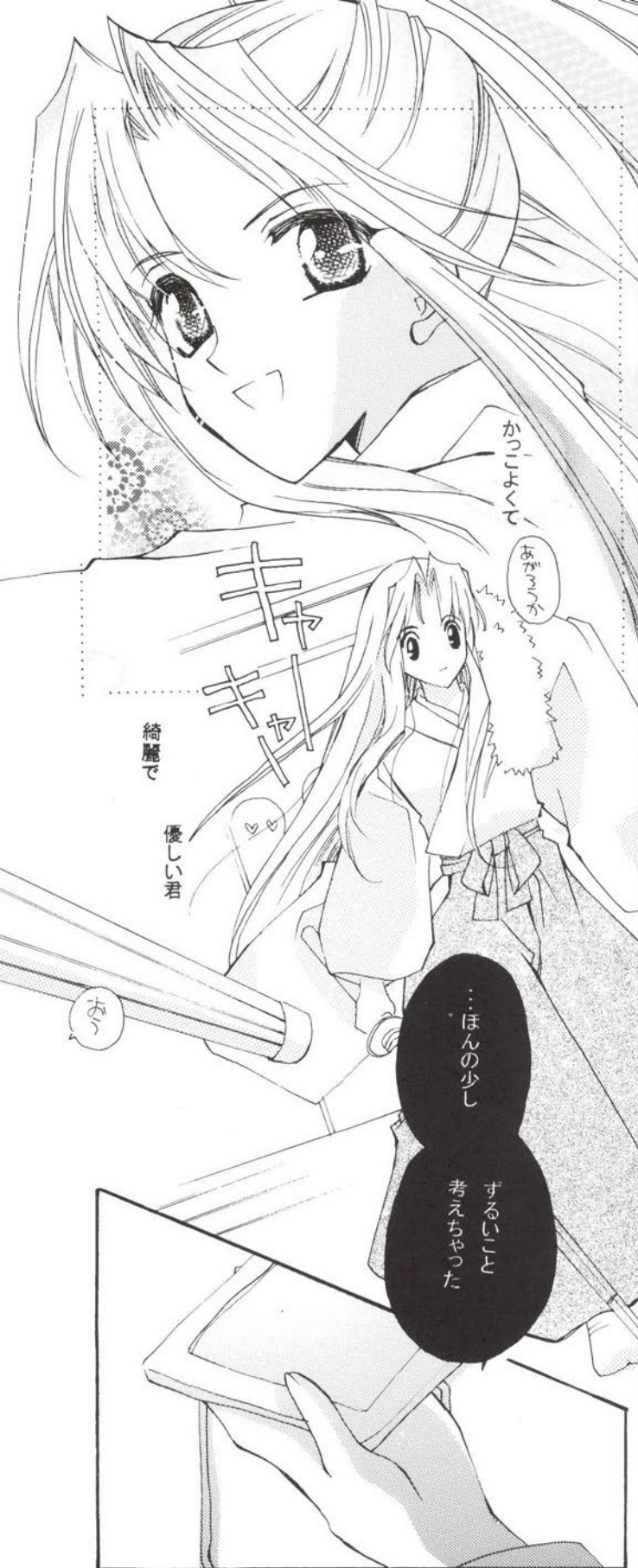
ポン



そりゃあ
そうだよ

向うは
とって





あたしなんて
ただのクラスメイト



だって

近づきたい

ねーねー！

シル・フィス

あまりにも遠い

君に

お弁当
一緒にして！

そのためには
手段は無用よ！

ガビーン！！



とろろめい。



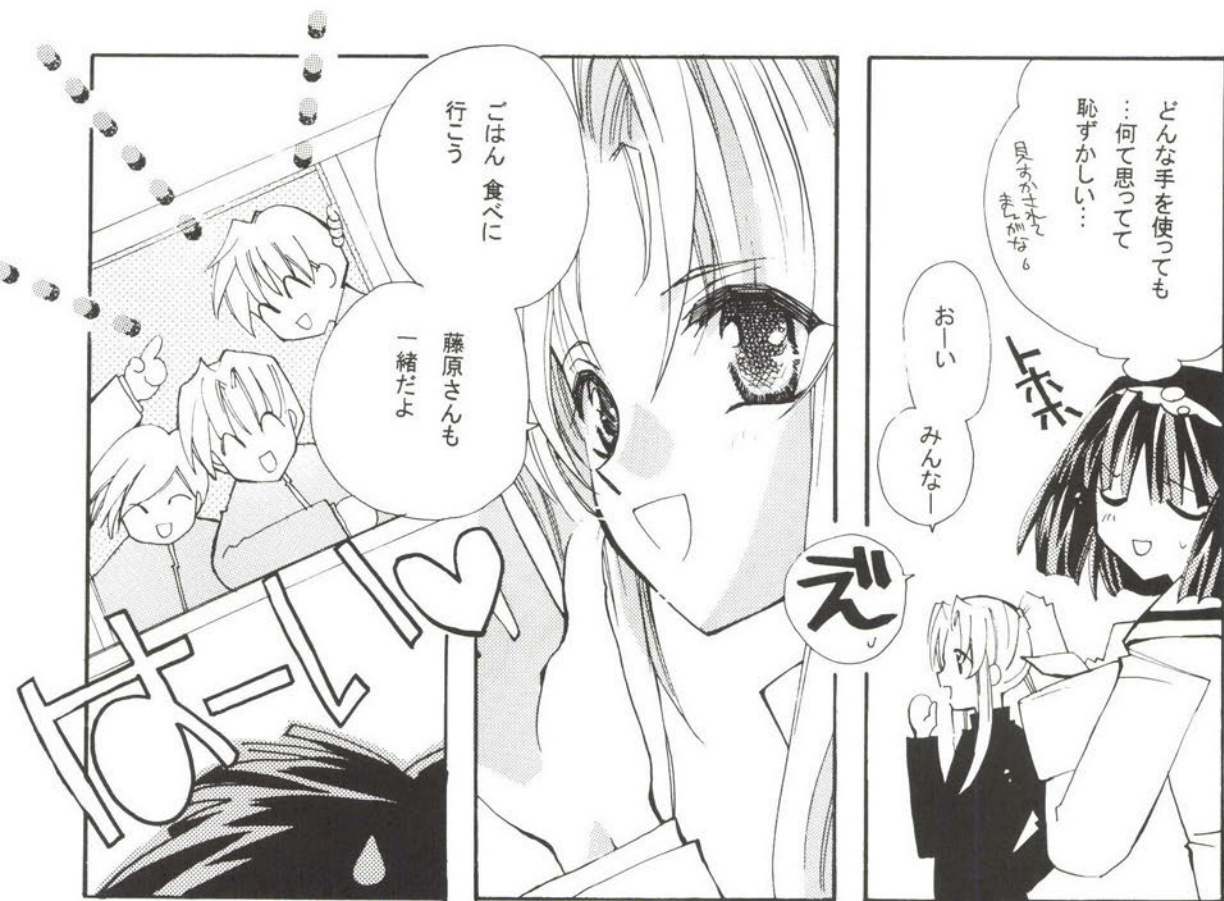
たのしみ。



んん



いいですよ
ご飯くらいならね





うん!

いっか ///

見透かされても
この人なら

どーせ気持ちちは
伝えるから

おはよう



つまり

メイは女の子を
好きになって
しまいましたの?

おは!! ×イ×ミル〜。

あきらさんに
ありがとう。

出發前に

いるものと
 いないものを
 分けましょう

いらない
もの

い3もの

携帯電話は
いりますわよね

EX-110
2131540

いいませんね。

電波は届かない場所ですから

スタック

通帳と印鑑と株式証券は
いりますわよね

物人

いりませんね。

あそこに至つては
ただの紙切れになります

ぬいぐるみ……

お友達ごとの

…一個くらいなら

持っていてもいいですよ

いらない
もの

113
もの

いらない
もの

113
もの

いらない
もの

113
もの

おいは何より下?

愛の孤島
ですのね……

かんぱーれ

何も心配はいりません
身一つでいいです

あなたはただ
レコーディングと
私にだけ集中して
いればいいですよ

ちかあ
の
限リ



……追いかけて
引き止めたら
よいのでは？
とくに……

いらぬ箱に
分類されて
それどころじゃ
ないらしいぞ



おわり。あきさんのおめかしは、きんきんアイズ×ティヤナのどろろとわかっていながらも。(笑)
いんちき長!!。ふ死

初出：シークレットサービス(二点共)

まんがは奥付に、カットは後書きに使ってました。
キールとディーナのまんがってなにげにこれ一本しかないかも。まあ、描いてないカップリングの方が多いですけどね。



アキラです。

ディーナって主人公の中では一番動かし辛くて、あまり漫画に出来なくて。でも、ある作家さんにディーナが一番好きだと言ってもらえて、これからは出来るだけ描けるようにしようかな、と試してみたり(笑)。



おれもさ 点取り科目の1つだが、たいてい

幸

福

論



「これは、童話になりそこねた人達の物語…」

「よくお似合いですよ」

「…そうかい」

女官達が口々に誉める様は滑稽だった。

三日後には式典が行われる。初めての、自分の「公務」だ。その日から、自分は『皇太子』となる。離宮から移されて二年。期待に震えてやつて来た。『その日』を心待ちにしていたはずなのに、あっさり理想は砕かれた。

鏡に映るのは、美しい衣装とはりつけた笑顔の自分。

見目麗しき王子と、誰もが称えてくれたこの姿の正体が、醜いアヒルだと知ったらどうするのだろうか。

秘密を知ったのは、一年前。…死ねなかった一年。

「お、立派、りっぱ……！」

「あら、シオン様。だめですよ、どこから入って来たんですか」

振り向くと、窓辺からダークブルーの髪がちらちら覗いている。

「いいじゃん。もう今日くらいしかこういう事も出来ないんだからさー」

とさん、と軽快に窓から上がってくる。

シオンは、押し付けられた「学友」という奴だ。…余り、好きではない。

「帰れ」

「あ、つれないでやんの。お前、どーしていつもそうなの？」

そんなんじや部下はついて来ないぜ」

「…私に意見するな」

おちゃらけたひやかしに、わかっているもムツときてしまう。相性が悪いのだ。

「だって、こわ……！」

また、女官達が殆どシオンの言動を取り成さない。そういう意味でも自分に勝ち目はなかった。

「でも、俺、お前に話があるんだ」

「私には無い」

「俺にはある」

「…そのうちな」

「今日じゃないとダメなんだよ」

「今日は忙しいんだ」

「そうなのかな？」

最後の言葉は自分でなく、女官達に向けられた。

「ええと…本日は衣装会わせの後、自室で休養、と…」

「…ばっ」

「あ、そーなんだ。なんだヒマじゃん！」

罵声を遮られ、かわりに失言した女官を睨む。

「ほ、ほほ。では皆さん。おつかれさまでした」

圧倒的な速さで縫い箱などを片付けると、女官達はきれいに自室から出ていった。

「…どうしてみんなこいつに甘いのだ」

「ん？なんだ」

「…別に！」

顔と愛想が揃っていれば無敵、というのを実践しまくっている人物。齢十六歳でこれでは、将来が本当に不安である。

しかもどう考えてもこいつは自分の一生に関らざるを得ないのだ。

…秘密を、知られている以上。

「それ、ずつと着てるのか？」

「そんなわけないだろう。今、脱ぐさ」

「へー、自分で？」

「私は何だつて自分でやる。」

靴の上げ下げにまで係がいるなんて、市井の者から見たら滑稽きわまりないだろう。

「ま、そーだけど。へー、いい心がけじゃん」

「…お前に誉められても嬉しくないな」

息苦しいスカーフは早々に取ってしまう。…取っても、息苦しきの度合いはあまり変わらないのだが。

「しけたツラ」

「もともと、こついう顔だ」

「お前みたいな王様、俺やだな」

「…私も、そう思うよ」

国なんて愛せない。ただ、死ぬなと言われた。

母の、死の間際。それを守っているだけだ。他に理由はない。

「…王妃様も、なんで俺を巻き添えにするかな」

「墓にでも聞けばいいだろう。…それが用事か？」

恨み言を言う事が。

「…ちがう」

ため息。

「お別れを言いに来たのさ」

「…え？」

目を見ないで話していた。だから気づかなかった。

濃い茶色の目は、真剣な物事を語っていた。口調はそのままで。

「俺、出ようと思つて。」

「…シオン」

それは意外すぎる言葉だった。

「伯爵が黙っていないぞ」

「オヤジね。煩いのはわかつてる。」

だからさ、後始末よろしく頼むよ。追手さえ来なけりや、なんとかなるからさ」

「何を勝手な…！」

「それに、俺がいなくなった方が気楽だろ。お前。」

大丈夫、どーせどこかで野たれ死ぬからさ。安心しろよ」

にこり、と笑う。シオンの笑顔は気楽で、重みが無い。本当の事を綺麗に隠してしまう。

「…なぜ、私に頼む」

「そりやあ、権力があるからさ。お前には。望まなくても」

「……」

痛い言葉だった。

「じゃあな。王子様。それだけ、言いたかつたんだよ」

一方的に話を終わらせると、ひらりとシオンは窓枠に飛び乗り、器用に下へ

と降りていった。

それを見送り、息を吐く。

「好きなだけ、切り付けていったな……」

言葉のナイフ。それが彼の一番の武器で……今のは確実に小さな復讐だったの
だろう。

彼の未来を狭めた事への。

(でも、それは私のせいかな?)

どうしようもない事。誰もが抗えない運命の淵に捕まってしまっただけなのに。

……春の風といえど、夕闇が迫れば冷たい。吹き込んでくるその冷たさは、小さな決意をさせるに十分だった。

「……どーしてこうなっちゃうかなあ」

「……往生際が悪いぞ」

「……ことごと体ごと揺れる荷馬車に、二人がいる。」

「俺、誘拐犯って事?」

「そういう事だ。追手が山のようにやって来るぞ」

「……うまでして、俺を巻き添えにしたいわけ? そんなに心が狭いと思っ
てなかったぞ」

その声音は密かに怒りを漂わせている。

「……わら束に寝そべり、シオンはふてくされていた。思わず笑ってしまう。」

「格好つけすぎるから悪いのさ」

それは別れの言葉を指している。

「義理だろうが、義理! お前だったらやってくれるだろうと……」

「私を選んだのがいけないよ、シオン」

「……お前が……ここまで思いきるとは思わねえよ、普通」

「……そうかな」

「……そうだろう」

青い空の向こうには、けふる雲のような王都の影。
出てきて、しまった。

今ごろの王宮は、激しい喧騒で……うた返しているだろう。

しかし、王に伝えられるのには間がある。それは自分の経験による読みだ。

「……イイコを演じてきた今までの価値が試される。」

「……そんなはずはない」と思わせることが出来れば、それだけ追手をかけるという
判断が遅くなる。

時間が勝負のこの逃走劇には、それは必要なかけひきだった。

「私を逃がしてくれるだろう? そうしなければ、私はお前を売るよ」

「……悪魔かよ、その笑顔」

気持ちが良いかった。

こんな自由な気持ちがあるとは思わなかった。

誰も、何も、自分を見ない。薄汚れた服と、束ねないばさばさの髪、古ぼけた
剣。

それらを渡しながら『似合わない』とシオンは言った。

それでも、本当の自分は『……こう』なのだと思う。

名前は、逃げた先でつけようと思った。セイリオスという自分は王都にしか
なかったのだから。

「……行き先は、俺が決めるぞ」

「別に……でもいいよ」

「それと、設定な。名前と身分がバレたら即、おじやんだ。兄弟って事にする。」

そうすると通りやすい」

「……こんなに似てない兄弟でいいのか?」

「……じゃあ、お前女装するか? 夫婦ってのも通りやすいんだ」

「……兄弟でいい」

観念したのか、シオンは実際の「逃走」の算段をつけ始めた。

内容を聞くにつれ、シオンは本気でこの国を出るつもりなのだと理解した。

それをもっと前から決めていたのだろう。二セの通行証、偽名、見せ金、いくつ
かの変装用具……本心に『貴族』なのかと疑うような、ありとあらゆる手段が彼
の手のうちには用意されていた。

「……どこから……こういう物を仕入れるんだ?」

「女。」

「……」

そう言われると黙るしかない。その点に関しては、シオンより遥かに奥手だった。

「…予定外のお荷物が増えたからな。いろいろ考えなきゃならん。街にいたら起こせよ」

そう言い捨てると、背を向けてシオンは横になった。馬車のわら束は寝床のかわりにもなる。

「…わかった」

泥棒避けに、二人交代で眠る。それはさつきシオンに言われた事だ。しかし、どうせ、眠れないだろうと思う。この気持ちの高ぶりには、とても勝てない。

…そして、怖い。

何かがとても、怖かった。

「…お前、寝ないで大丈夫なのか」

「ああ、どうせ眠れないから」

確実に距離を稼いで、クラインの土地はもう終わりに近づいていた。場末の木賃宿。自分達の状況では、似合いの場所だった。

「こんな寝台じゃ寝れないか」

「そんな事はないが」

イヤミの入った言葉に、つい抵抗してしまう。

「嬉しくて、眠れないだけだよ」

「そんなに嬉しいかねえ。逃げてるだけなのに」

「お前だってそうだろう」

「…ま、そうだけだな」

そう言っただけでシオンはズタ袋から何かを取り出した。

「なんだ？」

「いい」と教えてやるよ。お前、金の稼ぎ方知らなそうだから」

パラパラとカード、そして「イン」を取り出す。

「金って…私はちゃんと働くよ」



「……ずっと、そう思ってたならな。ま、覚えといてソンはねーから」

ピン、とコインはシオンの手から飛び跳ねて、一瞬後には右手で受け取られた。

「どっちだ？」

「は？」

わかりきった事を聞く。

「間違ったら銀貨二枚な」

「……右手に決まってるだろう」

シオンはニヤリ、と口の端を歪めると、両手を差し出した。

右手は空っぽだ。

「左？」

「二枚な」

「おかしいじゃないか！」

「そ、おかしいよ。イカサマだから」

そう言いながら、右の袖を振ると、コインが一枚転がり出てくる。

「コインがはねるときに一瞬注意がそれるだろ。そのスキに左手にコインを握るわけ。んで、取るフリして……この袖にね」

「……お前、そんなこと！」

「……こんなの初歩だろ。街じゃあたりまえの事なの」

「……私はやらないからな！」

「きれいな事ばかりじゃ、どーしょーもないぜ」

「……」

やつぱり、こいつとは気が合わない。その確認をあらためてした。

「どーせ、寝れないんだろ。今度はカードでやってみるか？」

「……チエスだつたら負けな」

「あいにくそういう高尚な物はねーなあ。こーいうモノならあるけど」

苦笑いをしながら、シオンはテーブルにボトルを取り出した。

「飲むか？」

「ラベルは最高級品だった。」

「……頂こう」

未成年なのだけれど、今は年のサバを読んで十六歳という事になっている。

セイリオスでない自分なら、かまわないだろう。

シオンも何も言わなかった。

透明な蒸留酒は瓶のへりに数滴残る程度になり、テーブルには負けこんだ銀貨が無造作に置かれる。不思議だった。

昨日までの日々は、まるで遠い過去のようにグラスの向こうに霞んでいる。

「……だから、寝ろって」

最後の一杯を名残おしそうに飲んでいる。

「お前こそ」

「持たないぞ、明日」

「……持たせるよ」

心地いい酔い。シオンが本気で『しまった』と思っているのがわかって、余計に胸がすく。

「本気で酔うなよな。魔法でそういうのは何とか出来ないんだからな」

「うん……わかつてるよ」

そう言つてグラスに手を伸ばすと、取り上げられる。

「もうこれは俺が飲む」

そう言つて、あつけなくそれはシオンの腹の中に収まつてしまった。

「あ」

「あ、じゃない。ほらほら、お子様は寝てろ」

首ねっこを押さえられて、なんだか笑い出したくなる。

「……こんな風に、誰かと話せるなんて初めてだ」

「酔っ払いが」

苦々しい呟き。だからこそ。

「……シオン、私は十六歳に見えるかな。よくもバレないものだと思つたよ」

「はつきり言つて見えねえ。でもまあ、世の中童顔な奴もいるからな。」

女だつて言い張るよりは真実だろうよ」

「じゃあ十四歳には？」

「……年相応だろ」

「そうだね。十を越えると、それなりにサバが読めるようになる」

「……何が言いたい」

シオンが聞きたくなさそうに眉根を寄せた。それがまた、おかしい。



「どうして私が離宮で育てられたかわかるかい。なかなか、かわりが見つからなくて、不在の時間があつたからだよ。赤ん坊の成長は目に見えすぎる。だから「まかしがきく外見になるまで、隠されたんだ」

「酔っ払いは、寝ろ」

マントが乱暴に被せられる。笑ってしまう。

余りにも自分が滑稽で。

「私は、本当はいくつなんだろうね?」

「…しらねえよ」

「…一体、私にはどんな血が流れているんだろうね。流した事がないから、赤いかすらもわからないんだ」

「…お前が寝ないなら、俺が寝る!」

古い木が、軋んで鳴った。シオンが怒っている。

…自分は、笑っている。

「…おかしんだ。どうしてこういう顔しか出来ないのか!」

はりついた笑顔。

真剣な話をするにも、こんなふざけた表情しか出来ない。自分と言う存在が生まれ、育った記憶のすべてをたぐつても、あるのはそれだけ。離宮にいた頃は、『心から』と言えた気もするのだけれど…

「…悪かったね」

向けられた背中とは、拒否。胸が少し痛んだ。

眠ることが出来なくても、横になるしかない雰囲気だった。…ランプの油も、もう足りなくて。

硬すぎる寝台は冷たく、寝心地が悪かった。

「…」

何か目をつづらないで済む方法を考えないといけない。たとえば。

「王子様よ」

「…なんだい」

意外にもシオンの方が話しかけてきた。

「俺さ、どうして王妃様が俺にも秘密を話したか、わかったよ」

「…どういう事だ?」

「…そのうち、わかるさ。お前なら」

聞き取るのが難しい大きな言葉だった。そして、そのまま会話は途切れ、まんじりともせず夜は明けた。

それからのシオンの『逃走』は、まったく見事としか言いようが無かった。設定は確実に効果を為し、誰も二人を疑おうとはしない。

シオンの作った『お話』と『小道具』は臨機応変に変えられて、悠々と街を通りぬけていく。

「嘘みたいだ…」

「ま、運も味方してるがな。追手もまだかかってないみたいだし」

不眠不休で、三日。難所のはずの国境も軽々と越え、もうここには潮の香りが届いている。

海があるのだ。

「あそこから船に乗るからな」

「すこいな。…どこにだつて行けそうだ」

「何を今更」

ずた袋を背負いながら、二人して笑った。

あの夜から、シオンはちよつと異常ともいえるくらいによく笑った。よく怒った泣いてもみてくれた。

心を開いたというのは、少し違う。…自分の表情の足りなさに、見本を示しているのかもしれない。

「…ありがとう、シオン」

「…ばーか。俺は誘拐犯だぜ。人質君」

軽い笑いは、変わらないが。そういう意味では稀有な存在だと、確かに思う。押し付けられた学友、目付け役とくるには余りにも破天荒なその性格は、正直好きではないし、今でもそう思うけれど。

彼がいなければ、ここまでは来られなかったのは事実だ。

「…お前、向こうについたらどうするんだ?」

「…普通の、生活をするよ。好きな人を作って、働いて、普通に死ぬ」

「似合わないな」

「そうかな」

「…本当は苦勞したんだぜ。お前、浮くんだ。…雑踏にも」
「…悪かったね」

でも、別れがあるのだ。ここまで来た以上。

青い海は、シオンの髪の色によく似ている。焼き付けておこうと思った。
もうここからは、一人です。

ずっと、目を開いて生きていく。一生。

「本当に、感謝しているんだよ…」

心から。

そう伝えようとして、何も言えなくなった。

「…おい、セイル？どうした」

「…感謝…」

「おい！」

シオンの手がぶれて、視界に残った。

目を閉じてはいけなさとわかつてるのに、閉じてしまった。

三日三晩、一睡もしていない。けれど、どうしても、閉じたくはなかったのに。
ここまで来て。

聞きなれた声が耳元で囁くのがわかつていても、もう浮上することは出来なかった。

体が、心を蝕んで。

逃走は、そこで終わる。港はすべて封鎖され、主だった施設には情報と似顔絵が流れていた。

シオンが自分をかつぎこんだ病院にも、もちろん。

追手は、実は最初からかかつていたのだった。

たぶん『夢を見させて』くれたのだろう。優しい父王の事だから。
すべてを知っている、父親であるから、なおさら。

「…」無理致しましたね」

女官が枕元で水音を立てた。瞼の上には、冷えた布が被せられている。

「……どれくらい、経った？」

「三日です」

それでは処分は終わっているだろう。
「……」

王族の誘拐は死刑だ。しかも残酷な方法で。

弁護をたくても、時はもう過ぎ去っている。すべてが終わってしまった今、
真実を話して何になるだろう。涙が、流れた。

眠れないのは、希望の裏にある犠牲に気付きたくなかったからだ。

目を閉じれば、嫌でも冷静になる。とことんまで植え付けられたその習慣は、
決して自分を忘れさせはしない。

(そうだ、夢を見たかったんだ)

浅はかなそれだけを求めて、目先の激情に流されてみたかった。

一度でいいから。すべてから逃げられなくなる前に。夢のような今にだけ、溺れてみたくて。

「……でも、ひとりでは…出来なかったんだ…」

自分が「王子様」でしかない事を、わかつていた。本当の自分なんて、とうに無
くなっている事に気付いていた。だから、利用したのだ。彼を。

権力を利用して。逆らえないことを、知っていて。

彼の言葉が突き刺さる。

『だってお前には権力があるからさ』

「殿下」

「……」

「殿下、王都にお戻りなさいませ」

「…その名で呼ばないでくれ！」

耳を塞いだ。

「皆、お戻りを望んでいます」

「…私は、逃げたんだ」

「いいえ、ただのお忍びで…」

「逃げたんだ！私はこの国を背負いたくない！」

それは本音。



「お前達を愛してなんている！大事にも思えない！…なぜ、私なんだ。なぜ、他の者じゃいけない？」

「あなたが、王子である限り、それは義務です」

「…！」

どす黒い気持ちが湧き上がる。

（…知らないからだ）

「私が、王子だって…？」

（私が、何者であるかを）

「愚かだよ。すべての民は。自分が崇める者が何かも知らずにいて…知ろうともしないで！」

（教えて、やろうか）

「はい、そこまで」

たんたん、と場違いにマヌケな音が響いた。

その声には、確実な聞き覚え。

「シオン！」

「よ、やっと起きたか」

そう言う彼の両手は、無残な包帯と封印がかけられている。マヌケな音は、包帯同士での手拍子だったかららしい。

「あ、コレ？研究院のおやっさんが総出でかけてくれたんだぜ。これって容赦なさすぎだよな。ま、それだけ俺が有能って事かもしれないねーけど」

寝台の横にやっていると、いくつかの傷が生々しく見えた。

そしてあちこちの、露骨な封印。ひとたび、魔法を使えば、途端に死ぬような。

「生きていたのか…」

「…おかげさまで」

笑い方は変わりない。もつとも、生きている事自体が奇跡なのかもしれないが。

「人払いを」

しかし、女官達は誰一人動かない。

「あ、むりむり。俺の後ろ、見えない？騎士様達が揃い踏みで殺気出まくり」

「……かし」

「時間ないんだ」

切羽詰った声。顔くしかなかった。

「俺はな、お前を騙してた」

笑ったままで言った。

「…な」

「お前は、俺にそのかされてバカをやったんだ。だから、今は目が醒めて…王子に戻った。」

そういう事においてくれよ」

「…嘘を！」

「だから、嘘でもさ。そういう事のほうが都合いいんだよ、いろんな事が」

「いいかげんにしろ、シオン！」

つかみかかろうとして、封印に阻まれる。

「っつ」

「あ、気をつけろよ。これ、凶悪だから。ほぐ…うとしたりすると、痛い目みるから」

「私は、帰らない！」

「だつたら、俺死ぬんだ」

「…な」

「お前を説得できたら、恩赦だそうだな」

「……」

軽々と、そんな事を言う。

「…別にいいんだ。戻らなくてもさ。死ぬのが早いから、遅いかの違いだし」

「卑怯だろう…そのかけひきは」

「そうだな。…だけど、やつぱりお前は王子だからさ…」

いくつもの目が自分の答えを待っている。たった一言を実行するために。

「望めば…死んでくれるのか」

答えはない。

「…私に、それを言えというのか…」

「殿下」

怒りで寝台に手をついた。やわらかな寝台。自分の現実。

「…それでいいよ」

「…それでいい、とは？」

「…お前達の望むものになる。それでいいんだろう」

目を閉じて、そして気付く。

「…最初からか。この茶番は」

「…だから、お前は浮くんだよ。…まぎれられない」

顔をあげると、もうシオンは出ていった後だった。

上手くいきすぎた逃走。それですべては説明がつく。

頼んだのは父だろう。あの聡明で慈悲深い人だから。残酷な程に冷静な王としてのあの人だから。

すべての気持ちは見透かされていて、手のひらで踊ってるだけだったのか。

結果、自分は前よりも縛られ、現実には打ちのめされている。期待された通りに。

このまま王子として生きるしかないのだ、と。

憎いと思う。

そして自分の愚かさに腹が立つ。

「…でも」

だつたらなぜ、彼は楽な道を選ばなかったのだろう。

危険がないなら、あんな回りくどい方法で…ここまで来ることはなかった。

どうせ世間知らずの自分だ。疑いもすまい。そういうものだと思ひこんだだろう。

『もうすぐ、わかるさ』

目を閉じる。

…考えてみる。

彼からの、聞こえない言葉を。

『いつか』

「……」

本当にそれは言葉にならない……未来の物語を紡いでいく。

ひとつしか道は無いと思う。

なのに秘密のなかに存在する、ありえない物語を残してくれるというのだろうか。

今日のことは、その『いつか』のための『練習』だと。

「母上……？」

一人で背負うなど、いう事ですか。それは、せめてものあなたの愛ですか。

逃げ道を作ってくれたのは、もしかして。

それはもう、二度と確かめられない気持ち。

もう、返せない、気持ち。

母が死んだ時、泣いたふりをした。泣く父を真似たのだ。

今日はじめて、涙を流した。彼女のために。

器だけの自分に、ただ枷をつけるだけの言葉ではなかったのだとわかった。

『死ぬな』という言葉は。

憎しみは強かった。

けれど、その形は今、何かに変化していく。

陳腐で、単純な、あたたかい何かに。

三日三晩で走りぬけたその道は、結局一日半で戻ってくる事になった。

その短さが、本当に夢の日々だったという事を実感させる。

「シオンの容態はどうなんだい」

「……さあ。わかりかねます」

「そう」

たぶん彼とは二度と会えないかもしれない。

もつとも会いたいの自分だけで、あつちは「役目は終わった」と思っているに違いないのだが。

カイナスの家は、彼の放逐を決めたという。

もつとも表面的に、だろうが。あの家は三男坊に甘い。

式典は一ヶ月後に延期され、今はそのための準備のやりなおしと、謹慎がいつ

しよくたになつてゐる。(要するに部屋から出られないという事だ)

「でも、これもあいつの台本通りという事かな」

どうせ、出るつもりだったのだから、放逐は渡りに船という事なのだろう。

そのあたりは、なんともしつかりしている。

「権力を、持たないといけない……」

そうすれば色々な可能性がやりやすくなる。

いつかここを出ていくにしろ、命を共にするにしろ。……選べる道は多いほうがいし、使える道具は増やしておいた方がいい。

それはあの夢の日々でシオンから学んだ事だった。

「でもね、母上。……あの男はちよつと、人選の趣味が悪いと思うんですよ」

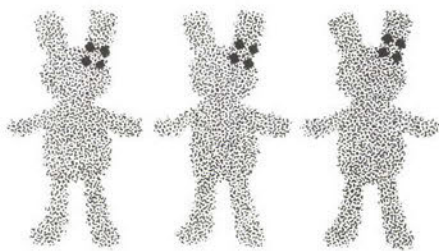
人の形をした雲にそう語り掛けると、困ったようにそれは崩れて流れていった。

笑ってしまった。心から。

初めて、美しいと思った。この国を。

その後。

強引な人選によって、一人の男が筆頭魔導師に名を記す事になる。





初出 :
上カット「シークレットサービス」
左カット「幸福論」

コントラストで描くのが結構はまりますよね。割とベタ髪描くの好きなので(でも大変)、シオンは割と描く方です。イーリスは友達が好きなので、逆の意味でよく描きますね(笑)。服考えるのが楽しいです、イーリスは。

次ページからはラブマニアの再録です。イラストばかりの本だったのです。今考えると出さなければよかったかもなあ、という本なのですが(笑)当時の私には必要なものでした。しかし絵が違いますね、とほほ。とある編集さんに注意されて、幸福論前後から大分いじり始めました。自分でも多々反省する事がありましたので。それが良いか悪いかは別として(苦笑)。でも自分では良い方向に進んでいるつもりです。口絵に表紙も再録していますが、この頃はカラーインクの方が得意でした。今はよっぽどじゃないとインク触りません。下手になってるだろうなあ。(汗)



DIANA

ちょっと天然ボケで馬鹿一歩手前のお姫様。
セイリオスの妹で、クライン王国の第二王女。
ただし、あまりその自覚はない。
幼い頃に離宮で出会った、
金の髪の子が忘れられないでいる。
性格はあつとしているが、無自覚に乱暴。

●人間関係

(王宮)⇒生まれた所。窮屈

セイリオス⇒大好きな家族。
アイシユ⇒家庭教師。
シオン⇒遊び相手。
子供扱いするのでちょっと天敵。

(騎士団)⇒お努めご苦労

シルフィス⇒友達。
レオニス⇒堅苦しい。
頻りになる。
ガゼル⇒友達。

(魔法研究院・市井)⇒遊び場

メイ⇒友達。豆な子。
キール⇒無礼者。嫌い。
イーリス⇒ファン。歌が共通項。



SYLPYS

男女の区別が無いアンヘル種族。
セイリオスの出した法案により、
アンヘル村から留学してきた。
立派な騎士になる事を目指している。
全体的に人より二、三段腰が低い。
ちょっと内鬱的なところがあるが、
意志の強さだけは誰にも負けない
のがとリス。

●人間関係

(王宮)⇒尊敬

ディアーナ⇒王家の方。
セイリオス⇒王家の方。
アイシユ⇒秀才。あひなっかしい
シオン⇒怒い。

(騎士団)⇒尊敬

レオニス⇒怒いけど、尊敬
ガゼル⇒同期。つきあいづらいが、
ありがたい存在。

(魔法研究院・市井)⇒尊敬

メイ⇒変な奴。
キール⇒近寄り難いけれど、親近感。
イーリス⇒生き方に憧れている。

MEI

異世界から召喚されてきた女子高生。
お気楽・極楽なハイテンション台風野郎。
人より二、三倍騒ぎを起こすトラブルメーカー。
本人には自覚はあるが、直す気はないらしい。
一応、現実世界に戻るのが目的。

●人間関係

（王宮）⇒あってもいいんじゃない

ディアーナ⇒友達。
セイリオス⇒くえない人。
アイシュ⇒からかいやすい。
シオン⇒スケベ

（騎士団）⇒あつかれさまってカンジ？

シルフィス⇒友達。
レオニス⇒結構好き。先生みたい。
ガゼル⇒単純な奴。結構好き。

（魔法研究院・市井）⇒変なところ

キール⇒嫌い。
イーリス⇒お互い現実主義で、
ウマが合う。

文武両道・才色兼備。
絵に描いたようなカンペキ男。
ただし、妹にはちょっと甘い。
性格はこれまた真面目で優しい、理知的君。
・・・ただし、攻撃に出るときは容赦が無い。

●人間関係

〈王宮〉⇒生まれたので仕方ない

ディアナ⇒器量の妹。
ちょっとヤバいとは自覚している。
アイシュ⇒信用している。扱いやすい。
シオン⇒学生時代からのつきあい。
信頼しているが、素行は頭が痛い。

〈騎士団〉⇒よくやってくれている

シルフィス⇒妹の友達。政策の試験紙。
レオニス⇒信頼している。ちょっと堅苦しい。
ガゼル⇒レオニスの部下。はばえまい。

〈魔法研究院・市井〉⇒守るべき国

メイ⇒妹の友達。魔法研究の試験紙。
キール⇒アイシュの弟。
イリス⇒相対する権力。面識は無い。

SEILIOS

寡黙で知的な騎士団長。
シルフィスとガゼルの上司。
王家の人間に心酔している、
融通のきかない人。

LEONIS

●人間関係

（王宮）⇒絶対の忠誠

ディアーナ⇒絶対の忠誠

セイリオス⇒絶対の忠誠

アイシュ⇒面識はないが、優秀な人物。

シオン⇒嫌い。

（騎士団）⇒あるべき場所

シルフィス⇒部下。

ガゼル⇒部下。

（魔法研究院・市井）⇒魔法は好きじゃない。

メイ⇒獅子が狂う。

キール⇒個人的な感情は無い。

イーリス⇒民の娯楽の提供者。

研究院で働く魔導士。かなりの秀才。
アイシュとは双子の兄弟。(キールが弟)
口にする言葉のほとんどがイヤミ。
性格の悪さでは誰にも負けないが、
本人もそんな自分は結構嫌い。
メイを魔法実験によって呼び出した張本人。

●人間関係

(王宮)⇒普通レベルの敬意はある

ディアナ⇒わがままなお姫様。
もっとちゃんとして欲しい
セイリオス⇒有能な人物だけど、
シスコンぶりはちょっとグンナリ
アイシュ⇒双子の兄。有能すぎて、
コンプレックス。うっとおしい
シオン⇒何かとカマってくるので嫌い。

(騎士団)⇒必要だけど、興味はない

シルフィス⇒アンヘル種だというのは興味がある。
けどそれだけ。
レオニス⇒嫌いじゃないけど、やりにくい相手。
ガゼル⇒嫌い。過去に本を台無しにされた経験アリ。

(魔法研究院・市井)⇒愛着はある。

メイ⇒歩く台風。頭が痛い。
イーリス⇒なんとなく苦手。歌は興味ない。

KOEL



SION

クライン王国、筆頭魔導士。キールとメイの上官。
仕事をしないのに、なぜか偉いという不思議な人。
実家は結構なほっちゃん家系だが、あっさり勘当されている。
セイリオスとは学友で、幼なじみ。

●人間関係

〈王宮〉⇒なんとなくいる

ディアーナ⇒お子様。かわいい
セイリオス⇒友達。
アイシユ⇒かわいい。笑える奴。

〈騎士団〉⇒限な奴等

シルフィス⇒昔の友達に似てる。少し苦手。
レオニス⇒嫌いじゃない。
ガゼル⇒お子様。嫌いじゃない。

〈魔法研究院・市井〉⇒遊び場

メイ⇒おもしろい奴
キール⇒後輩。結構心配してる。
イーリス⇒昔の知り合い。性格が悪いけど馬が合う。



AISH

王宮で執政の一部をとりしきる文官。
別名・セイリオスとシオンの使いっぱしり。
基本的に人の言うことに逆らえない。お人好し。
魔法研究院のキールとは双子の兄弟だが、
弟にはけむたがられている。

●人間関係

〔王宮〕⇒尊敬している

ディアーナ⇒悪い方ではないが、
もう少しおとなしくなれば助かる
セイリオス⇒尊敬している。・・・ちょっと恐い
シオン⇒仕事をして欲しい。苦手。

〔騎士団〕⇒尊敬している。

シルフィス⇒綺麗な子。
レオニス⇒外見が恐い。
ガゼル⇒真っ直ぐで良い子。
キールと仲良くして欲しい。

〔魔法研究院・市井〕⇒好き

メイ⇒おもしろい子。
キール⇒もう少し他人と打ち解けて欲しい。
イーリス⇒実はファン。



GAZEL

近衛騎士団の見習い。
シルフィスの同期で、レオニスの部下。
レオニスに心酔している。
子供っぽさが抜けない、万年ガキ大将。

●人間関係

（王宮）⇒尊敬してるつもり

ディアーナ⇒王家の人。守る対象。
セイリオス⇒王家の人。守る対象。
アイシュ⇒好き。いつもお菓子をくれる人。
ジオン⇒嫌い。よく頭をぐしゃぐしゃにされるから。

（騎士団）⇒尊敬してる

シルフィス⇒複雑な奴。
レオニス⇒尊敬！

（魔法研究院・市井）⇒ホームグラウンド。

メイ⇒気が合う。
キール⇒心が狭い奴。嫌いじゃないけど。
イーリス⇒キレイだから、好き。

JELIS

流しの吟遊詩人。
 綺麗な外見と口八丁が武器。
 現実主義者で、お金に困らない。
 シオンとは昔の友達で、つきあいがある。
 権力者が大嫌い。

●人間関係

（王宮）⇒権力者は好きじゃない

ディアナ⇒権力者。個人としては悪くない。
 セイリオス⇒昔、シオン経由で聞いた事がある。
 悪い印象は無い。
 アイシユ⇒カモ
 シオン⇒昔の悪友。結構ウマがあう

（騎士団）⇒力押しの連中

シルフィス⇒カモ。
 レオニス⇒嫌い。権力におもねる奴。
 ガゼル⇒嫌い・・・だが憎めない。カモ。

（魔法研究院・市井）⇒変わり者の集団。
 性に合ってる。

メイ⇒おもしろい奴。カモ。
 キール⇒おもしろくない奴。

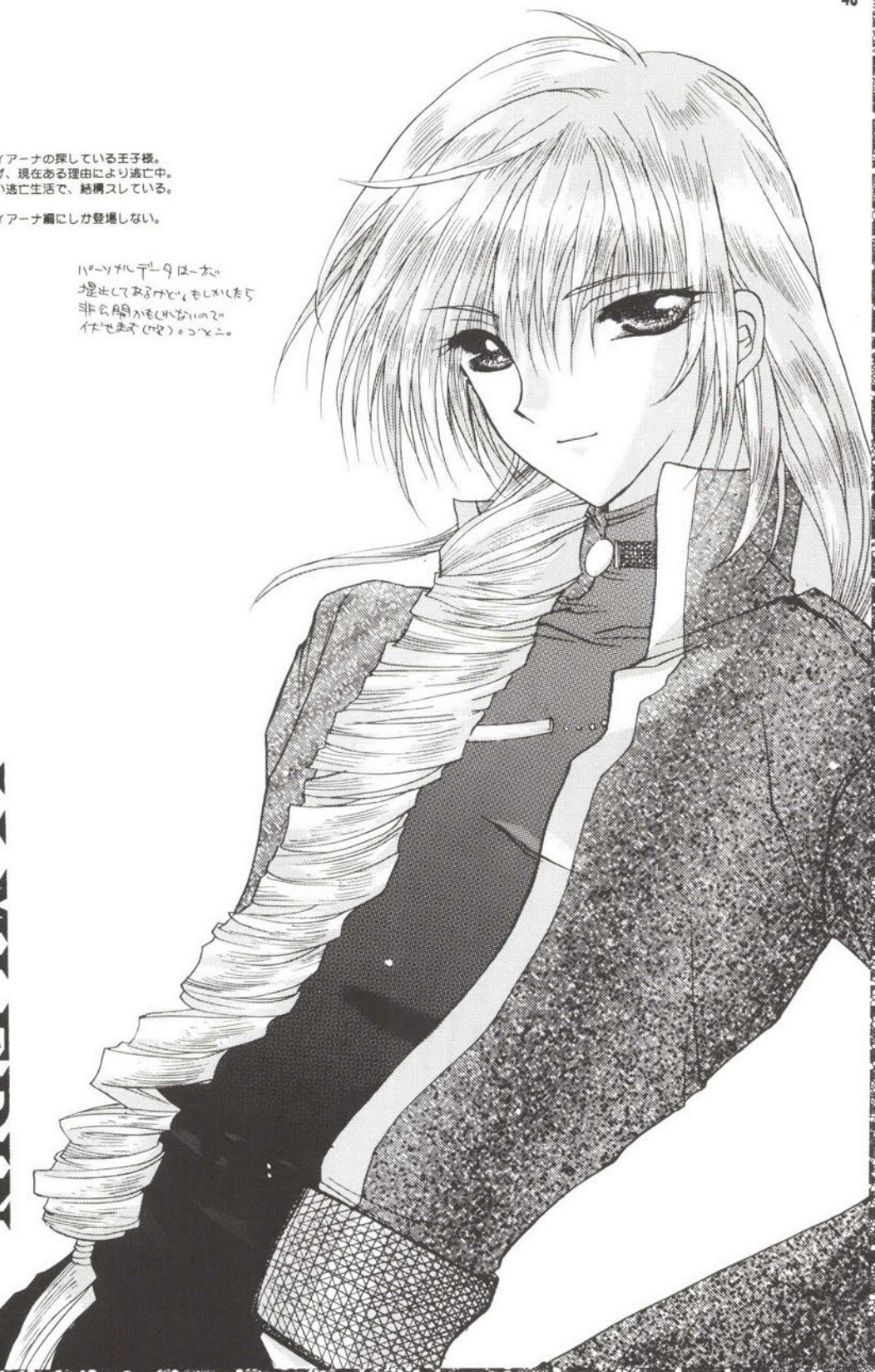


ディアーナを探している王子様。
だが、現在ある理由により逃亡中。
長い逃亡生活で、結構スしている。

ディアーナ編にしか登場しない。

ハニーナにデューは、
出出しておるナと、もしかし
非公開かもしないうの？
イナセアス（マ）の、マニ。

ALMLEDIN



NOCHE&RYUKUSEI

かくれんぼうなの？
何もありません。

正々(女)はアゲルくて
おもしろい下さーい。



初出:幸福論

前書きに使いました。

トーンだけ貼りなおしてあります。

あまり変わり映えしませんけど(汗)シルフィスって幻想的なイメージでとらえられる事が多いキャラだと思うんですが、私はひねくれ者なので(笑)原画のときも今もなるべく地に足のついたキャラに見えるように意識してます。

でないと、どっかへ飛んで行っちゃうような気がして。ファンタ全体、日常的な「ファンタジー」を強く出していると思っていたので、ひとり浮いてしまうのも困るというのも有りますが。しかし借り物の世界感だったので、シナリオにも本当に苦労しました。デザイン的にも最終的には好きにやっちゃいましたけどね(笑)。

ちなみに下のは原稿の裏にあったらくがき。

殿下の子供時代のラフみたいですが、なんで裏に描いてたんだろう。

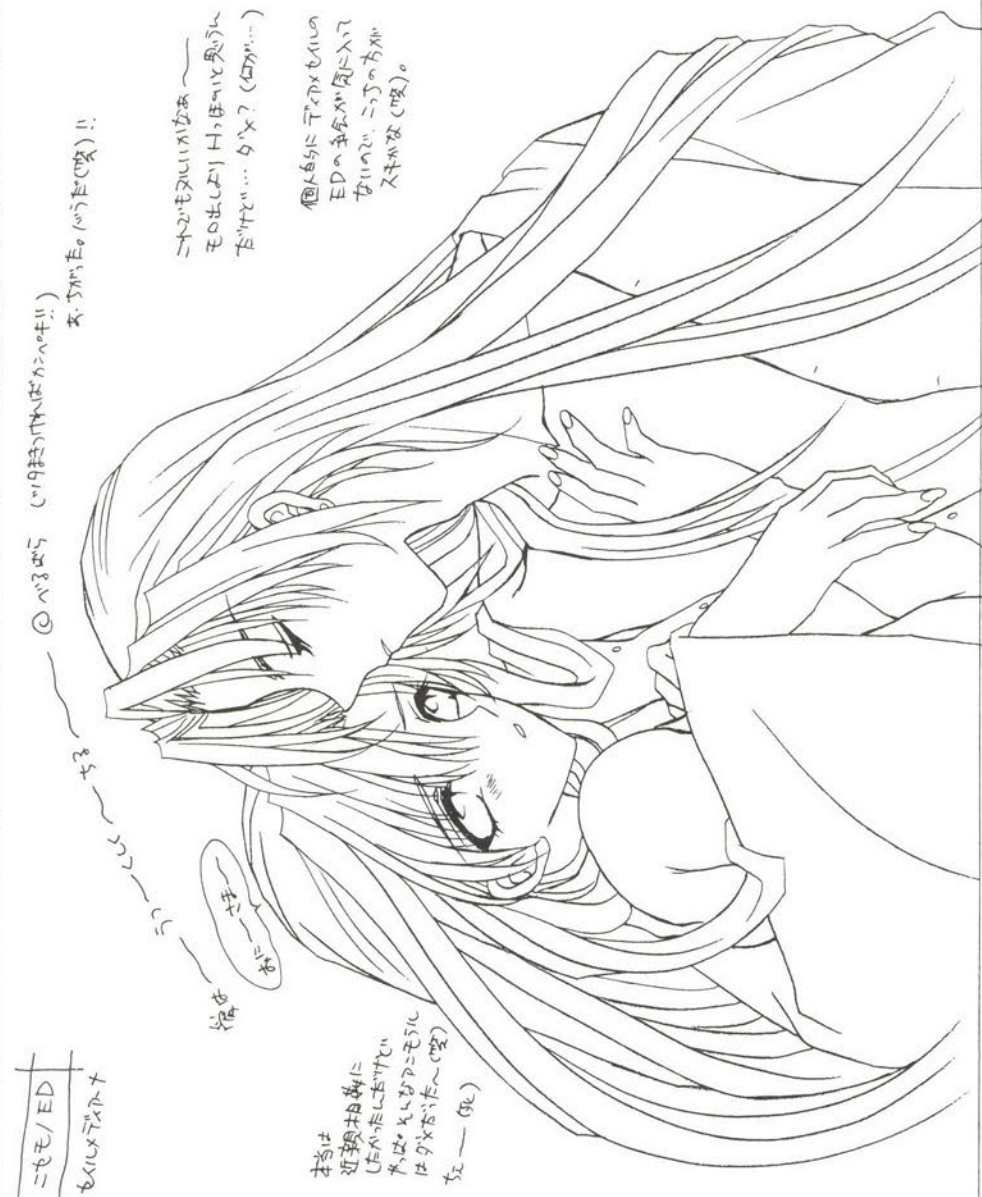
謎です。







アルムのラフです。立ちポーズも何気にボツが一杯あるんですけど、それまで原画入れるとパンクしちゃうので原画集には入れませんでした。



* R_2 は R_1 に対して $\text{R}_2 = \text{R}_1 + \text{R}_3$ (5)

おふざけで描いたイベント絵です。割と受けたので嬉しかった覚えが。仕事が終わった後の気軽なノリで描いたので、あまり深い意味はないです。どれも、でも実際塗ってきてくれる人はいなかったかなあ(笑)

私にとっての

幸せ とは

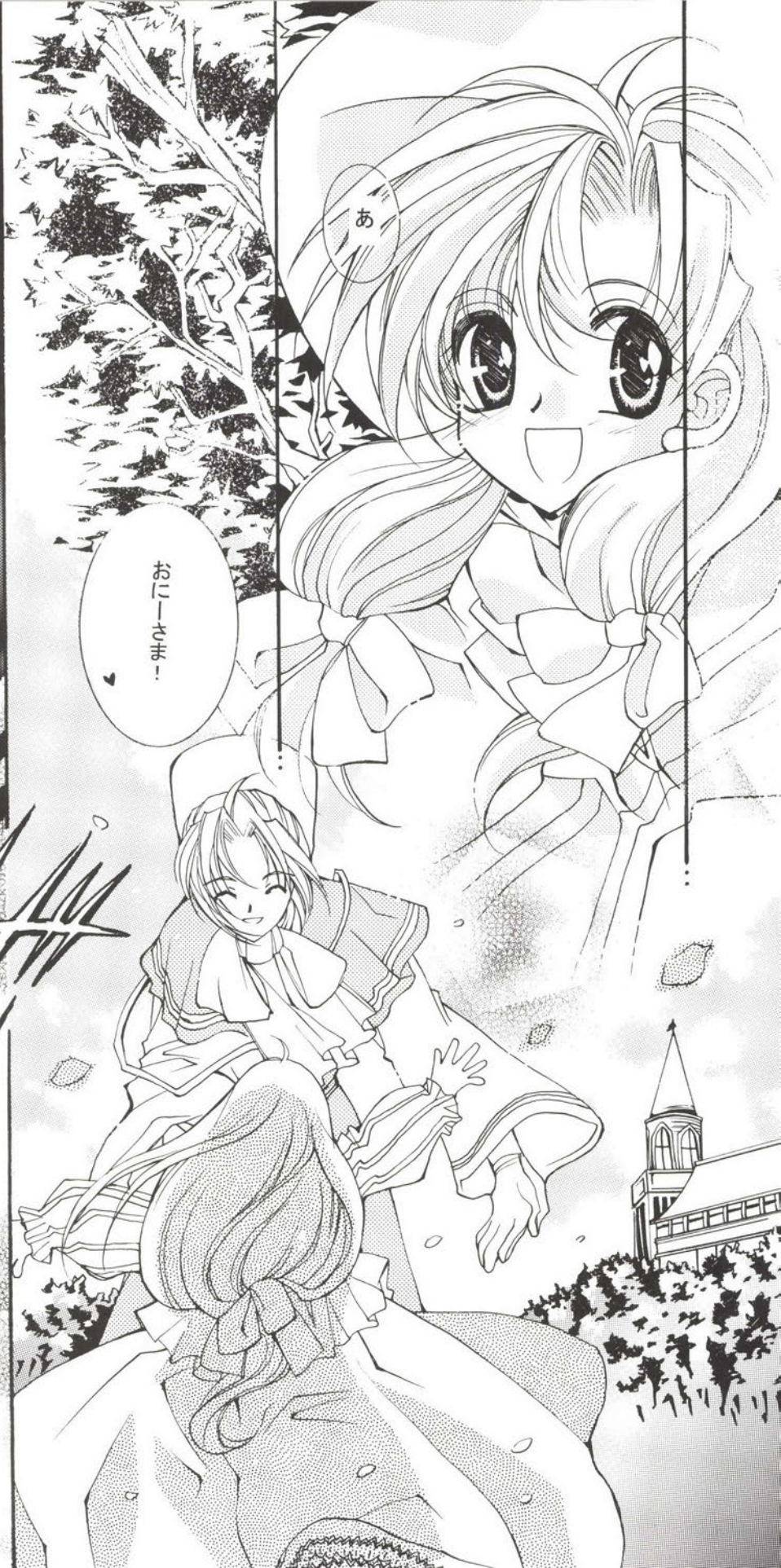
ディアナ!

幸 福 論

そんなものは
たったひとつ

おにーさま！

あ



いつもそばに
あなたがいること

ディアーナ

また魚を
見ているのかい

もういい加減
見飽きる頃
だろうに

めっ

あら
そんな事
ありませんわ

お魚さんにも
いろいろな種類の
お顔があるんで
すから

その瞳が

私を優しく

見つめること



君がそう言うのなら
そうなんだろうね

私も
信じて見ていれば

だけど



魚にも
個性があるの
かい？

ありますわよ！

じーっと
見ていれば
わかりますのよ！



君と同じ物が
見えるのかな

私にも



だから

こそ

不安で

ぽ
ふ

セイル…?

私達には

だめですわ

もっと強く
ならなくちゃ

聞けないことが
たくさんあって

ホロ…

本当に あなたは幸せ？

遠く離れたあの国の

やさしい やさしい人達を

あなたを 幸せにしなければ



考える



いまだ甘く 想う度



誰より 幸せにしなければ

ディアーナ

「もっと強く
ならなくちゃ」の

あたりかな

あわわ

…あまり
思いつめない
ようにね

私は十分
幸せなのだからね

それとも、
君は今に
不満があるのかな？

そんなこと！

セイルっ

いつから
そこに！

ギョ

…だったら
笑っておくれ

それだけで
私は幸せになる

何よりもまず
君がいる事が

私の心の
糧になる

65

…セイル
私
わたくし…ね

だいすき

だいすき

赤ちゃんが
出来たみたいです

ねえ あなたも

同じように 切なく 想ってくれているでしょうか



もつとあなたを 包み込む世界を

あなたに差し上げたい



故郷の思い出より 失った過去より



幸せにしたい

…嬉しいよ

うん…
コホー
家族が増えるのは
いい事だね

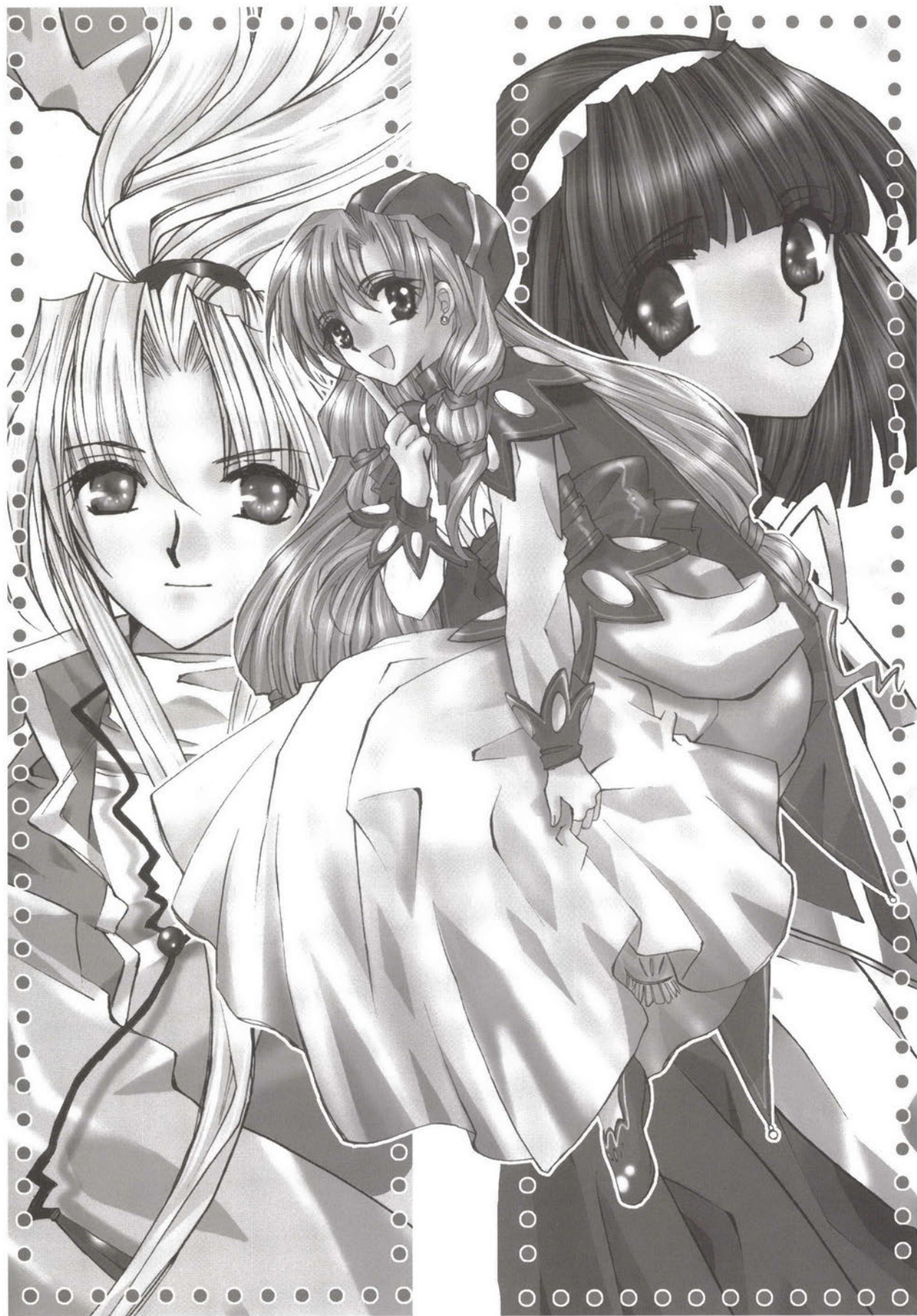
67

幸せになりたい

幸せの理論は

いつも私の
そばにいる





■次のページからはかれこれ 3~4 年くらい前の原稿です。すごく載せるの迷いましたが、腹をくくって載せます…（涙）。これで私のファンタものでのアナログ原稿は殆ど全部のはずです。（カラーとかデータで作ってあるものは別ですが）1998 年のいつごろだったかなあ。ファンタの発売前だったので、販促の一環として書きました。コンプティークさんの付録で漫画の冊子がついてまして、その中の一作品って扱いだったかな。他が殆ど美少女ゲームで、妙に浮いていた記憶が。下手というのもあるんですけど。あああ。（悩む）こう辿って行くと、なんとかうまくなってるよなあとか思ってしまうですね（笑）。

「CLAP!CLAP!CLAP!」（原画集/1999.8）より漫画部分のみ再録




初出：幸福論



Prologue of Fantastic Fortune

結城梓
原案：富士通



——運命は廻りはじめる——

——いくすじもの物語が始まる——

からからと回る糸車の
その先は

どこへ
つながっているのだろう……？

どこへ——？

どうしよう……
迷子に
なっちゃった……

いいかい
ディアーナ！
お前も王族の一員
なのだからね！

いくら自由時間
だからといって
みだりに外に
出てはいけないよ

特に北の森は
危険だから
行かないこと

約束できるね？

はい
お兄様！

なーんて
言っちゃいましたわ……

やっけ
外に出る

113

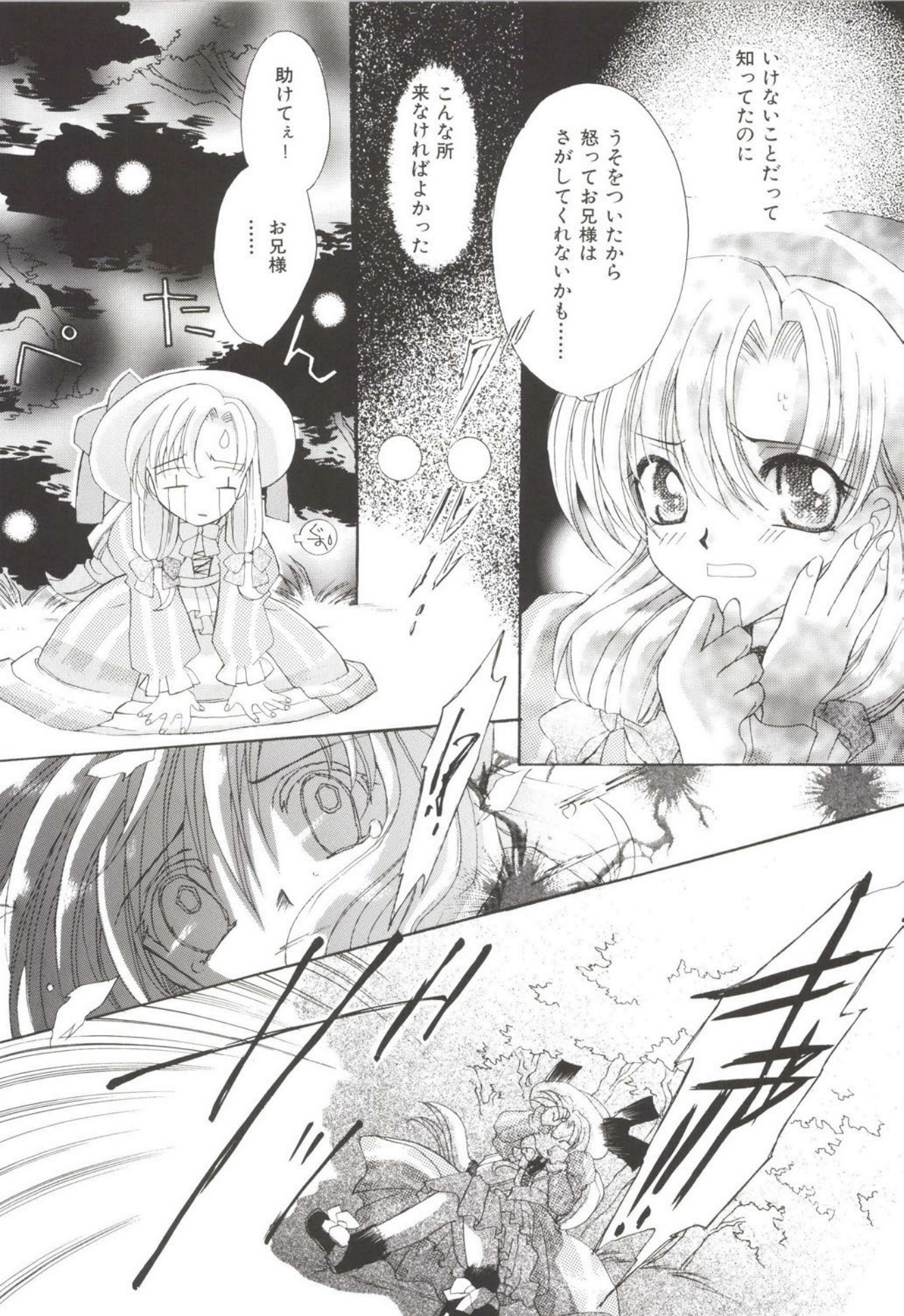
いけないことだって
知ってたのに

うそをついたから
怒ってお兄様は
さがしてくれないかも……

こんな所
来なければよかった

助けてえ！

お兄様
……





.....生きてる?

あら?

死んじやう!!

こんな時間にお散歩とは物騒だね

感心しないな早くお帰り



旅行者なんだね

ああ それで...
見ない顔だと思っ
ったよ

迷子...になっちゃったん
ですよ

ち、違いますわ!
お散歩してる
わけじゃなくて...!!

ほ

ぽ

...

そっ そうなんです
わよっ!!

なんて
わかりづらい
場所ですの

けしからん
ですわ!
責任取っていた
だかないと!

76

そうですわ!
あなた わたくしを
送りなさいな!

着くまで
ナイトにして
あげます!

いんぐわーめ

いいよ

やった!!

でも

そんな簡単に
約束をして
いいの？

僕だって
悪い人かも
しれないよ

あなたは悪い人じゃ
ないですわ

どうして
そう思うの？

……

このまま連れていく先が
君の家とも限らない
——信用するの？





「ふにや」では
ありません!!



ウソで
ごさいますわね



信用
な~~~~い

おたまりま
すアツキ...

とにかく……
居眠りの分の
課題は追加いたします

ええ——っ
そんなあ

真面目に
していれば
終わります!

あら

お客は？

——またずいぶん
戦っている
ようだね

まあ

殿

下!!

え!!

お兄様
ですの？

ちようど良い
ところにつ♡

いたっ!

ばかもの!
お前のことなど
お見通しだ

女史がわたくしのことを
いじめますのよ~~~~
こんなに真面目に
やつしませう
のに~~~~!!

おや
おや

まっ

おおかた……
居眠りでもして
課題をサボりでも
したんだろう？

おれ

そのとおりで
ございます
殿下

おれ

お兄様まで
そんなこと……

あうも

いい加減
お前には
本気になって
もらわねば
困る！

——三人とも
入れ！

兄だから
こそだっ

やな

三人？

多感

三人とも王家に
縁深い者たちだ

彼らにお前を
教育してもらう！

やだ



王族として王女として――
夢ばかり見ていては
困る！

はい……お兄様

あれから
五年

――姫

辛いのは

お前
だけでは
ない

誰しも
同じ痛みを
抱えて
生きているよ

人はすべて
思いうを
振り返り
そして捨てて

生きていく
のだから――

—仕官ですか？

大事だよ

とても

この笛はね

呪われて
いるんですよ

廻りはじめる
運命の—

望むなら
お主を選ぼう

やる気がないなら
帰れ！

—上等
じゃん



馬鹿に
つきあつてる
ひまはない！

帰ろうと思うんです
——僕

勝手に
召喚しておいて
好き放題
言わないでよ！

へへへ
会いた
かった！

かすかな足音が
聞こえ始める——

——
姫

もし君が——
変わらず今のままで
いてくれるなら

僕はまた
君に会いにくる
——迎えにくる

約束
するよ

きつと……

迎えにきてね

きつとよ！

いつ？

出会ったことが
運命なら

それでも
……待っていますわ

わたくし
決めてますの



もう絶対
約束やぶりは
しませんもの

何を言われても
捨てませんわ

最後まで
それを
信じたいから



——絶対に——

少女たちの冒険がはじまる——

おわり



ここまで読んでくださいます、ありがとうございます。
表紙に 10/29 とか書いてありますが、気にしないで
下さい(笑)。※

本当はこの日に大阪であったロマンス革命というフ
ァンタオンリー即売会に出すつもりだったんです。再
録本だから余裕～とか思ってたさっくり落ちてしま
いました。本当にすいませんです。

そのかわり表紙まわりも再録できました(ラブマニ
ア表紙の口絵とか)、それなりにレイアウトもゆっくり
作れたので私的にはよかったのですが。

実は再録本って余り好きじゃなくて(絵柄がぼろぼ
ろ変わってるのも恥ずかしい)、この本の発行は迷
ってたところがあったのですが、まあ一つの記念とい
う事で結果的には良かったかもしれません。

おかげさまでファンタもお安くなって(笑)再販され
まして、ご新規さんも増えたみたいですね。シナリオ
構成及びデザインを担当した物としては、やっぱり嬉
しいです。

色々な意味で不遇だったソフトだったので、喜びも
ひとしおというか。それは初回版から応援してくださ
る方も同じでしょうが(笑)。

私から言うのもおかしいのですが、ありがとうございます。
しました。何を言っても蛇足になると思うので、お礼
はこれのみですが(笑)。

後は本とか仕事とかで頑張って返していけたらな
、と思ってます。っていうか、それしか出来ないと思うの
で。

今回の本の変更点についてですが。

絵に関しては、当時のものはほぼ 100 パーセント
入れました。トークに関してはすべて無くしてしまいま
した。シーケツサービス、ラブマニアに関しては変
更点は一切ありません。

ただ、幸福論がらみの物はかなり改訂が加わって
います。小説はすべて元本の原稿をつかってます
(誤字もそのままです)が、挿絵に関してはトーンを貼
りなおしています。(原画は直していません)

漫画はまるまるやり直してしまったので、元とはか
なり違いますが、許してください。あれは悔いが残っ
てて、どうしても描きなおしたかったんです(汗)。

ただお話は全く同じですし、描こうとしているものも
変わらないので、昔の本を無理に手に入れる必要は
ないと思います(汗)。

※ 発売時
表紙がずいぶん
汚れました。
表紙を交換入替
した方がいいも
のですね





※このトワイベジは「ツキムネ」の
発行時の時と場所です。

同人活動してる人ってたいいそうだと思うのですが、昔の本って恥ずかしいんですよ、すごく。今売ってる在庫ですらもくはあ〜となるというか、刷りあがった瞬間に「もういやだあ〜!!」となるというか。私だけじゃないと思うんですが。だから昔の本の事と違って出来れば聞きたくないです。(笑)あ、でも感想のお手紙とかは嬉しいんですけど。(例え古本で買いました! だとしても)うーん、でも出来れば見て欲しくなかったりしますねえ。あ、商業誌のは別です。見てもらってナンボのものですから。でも同人誌は好き勝手やってる分恥ずかしさ倍増なんですわ。特に高校生の頃に書いた奴とかやめてえ〜(泣)とか思いますね、やっぱ(笑)。まあすぐ上手くなるわけじゃないんで、自分の歴史と思えばそれはそれで愛しいのですが、時々抹殺したくなるなあ、色々な事が(笑)。

発行した順番としては「ラブマニア」「幸福論」「シークレットサービス」の順です。

この順番だと本当に絵柄が変わってきたんだなあ、と実感しますね。特に眼の処理とか。トーンがどんどん少なくなってるし。はは、歴史ですね、本当に。

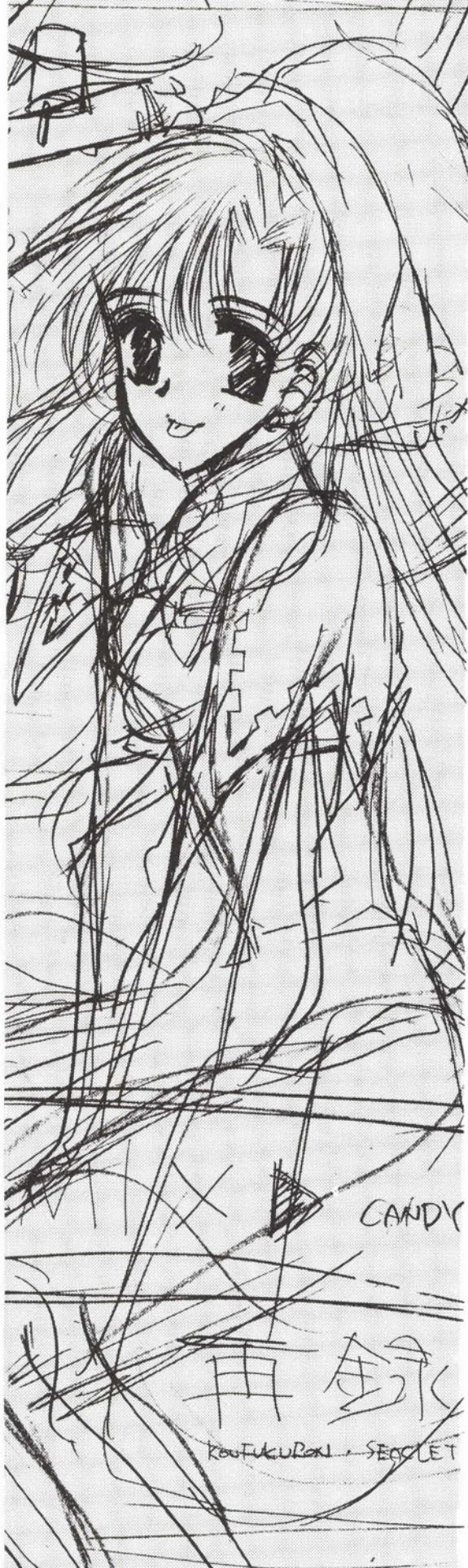
まだまだ下手なところも多いですし、未熟な部分もたくさんなのですが、上手くなりたいなあと思う気持ちは強いほうだと思うので、これからも地道にやってみようつもりです。なんかゲーム系のお仕事のウェイトが大きくて、なりたかったものにはまだ程遠い感じですが。ま、焦ってもしようがないんで(笑)。

今私に望まれている事を全力でやっていこうかなあ、と思っています。同人誌もゆっくりとやっていきたいなあ、と。又ペースはがくりと落ちますが、無理しても続きませんしね。おつきあいして下さいれば、こんなに嬉しいことはありませんが。

とにもかくにも、ファンタスティックフォーチュンを好きでいてくれて、ありがとうございます。

このゲームを作って良かったです。

12/1 ゆうきあずさ 拝



KouFukuRoxi - SECCLET

■奥付■

誌名：Fortune Cookie Plus（再録本）

発行：JEWEL MASTER

発行者：ゆうきあずさ

発行日：2001.10.14

ホームページ


発行者の許可のない無断転載・複写を禁じます。
現在ペーパー発行及び通販は行っておりません。



LOVEMANIA
SeacretService!
KOUFUKURON

2001 Azusa Yuhki/Fantastic Fortune book

FORTUNE COOKIE PLUS



and
plus contents!